

レニングラード所蔵敦煌漢文書

ポール・ドミエヴィル
林 信 明 訳

〔出典〕 Manuscripts chinois de Touen-houang

à Leningrad, *Toung-Pao*, vol. LI, 1964,

pp. 355-376.

一九六〇年八月十四日、ユーラシア大陸の両極から二人の中国学者がレニングラードを訪れた。ひとりは日本人で、もうひとりはフランス人であった。いずれも敦煌文書の専門家である。ソビエト科学アカデミー・アジア民族研究所(旧「東洋学研究所」)は、ネヴア河に面する豪華な建物に所在していた。その記念碑的階段を登って行くと、彼らのためにその種の文書類が机上に用意されていた。それを目の当りにした二人の驚きは、言うまでもない。文書の所在について、彼らでさえも知らなかったのである。事実、ほとんどの中国学者が半世紀近くの間、そうであった。辛くも一九二〇年にV・M・アルクセーエフ(Alekseev)⁽¹⁾が、それに続いて二二年に文書の発見者、S・オルデンブルク(Oldenburg)⁽²⁾が、さらには二九年に狩野直樹がそれとなく触れている。また一九三二年にP・ペリオ(Pellio)⁽³⁾は、それらにもとづいて文書に言及している。これらの文書類の目録作成を試み、その内の小断簡を公表したのがK・

K・フルーク (Flug) である。彼は東洋学研究所のメンバーの一人で、『宋代版刻書の歴史』(死後出版)⁽⁵⁾ というすぐれた著書で、その名が知られている。一九四二年、フルークの突然の死がレニングラードを本拠とするこの文庫の研究を一時中断させた。しかし一九五七年以降、L・N・メニシコフ (Men'sikov) の指導の下に若手の中国学研究班がこれを再開した。これに、V・S・コロコロフ (Kolokolov) 教授、故鄭振鐸 (Zheng Zhen-tu) を含む数名の中国人研究者が協力した(第一分冊、九頁)。文書類は、R・V・カンチンスカヤ (Kandinskaja) の手で剝し、綴を伸ばし、補強し、実質上整理されていた。それは、B・I・パンクラトフ (Pankratov) 教授の指導があつてのことである。

この作業の最初の成果が既述の三冊に含まれている。原稿は、一九六一年七月～十月にかけて印刷に廻された。校了のゲラ刷が一九六三年四月～九月に出来上がってきた。従つて出版物の完成は、四年半の作業日程——印刷期間は含まれない——で事足りた計算になる。これに対してL・ジャイルズ (Giles) の『大英博物館所蔵敦煌将来漢文書目録』は、完成までに三八年の歳月(一九一九年—五七年)を要した。またパリ国立図書館所蔵敦煌漢文書目録の最初部分(番号を付す二七二三文書中五〇〇号までと、その内の小番号のある千余の断簡)は、今日目の目を見ている。それは、J・ジェルネ (Gene) と呉基昱 (Wu Chi-yu) が一九五七年頃に作成したものであり、現在(一九六四年)、国営印刷局で印刷中である。日本では、大谷探險隊が一九一〇年から一四年にかけて将来した文書の目録を、五八年以降、京都の“Monumenta Serindica”誌が収録している。また敦煌文献研究委員会が五二年に大英博物館から入手した完全マイクロ・フィルムにもつづいて、ロンドン文書の詳細な目録作成を行なっている。数年来の発表の予告にもかかわらず、それは今だ実現していない。中国においても、北京文書の目録は標題別⁽⁶⁾ であり、内容に関する目録は存在しない。中国、日本が文書そのものすぐれた収録本を出版したのは事実である。しかしその点について言えば、わがソビエトの同学者も、その迅速さと成果において等しく賞讃されてよい。

オルデンブルクは一九一四年から一八年にかけてトルキスタンを探険した。その際、彼がロンドン、パリ、北京本に匹敵する大量の漢文書（レニングラードで約一万点と伝聞する）をどのようにして蒐集できたのかは、明らかでない。この点について先に挙げた文献は、何も触れていない。オルデンブルクは、敦煌洞窟の調査に、発掘 (*zaskopki*) という現代科学の手法をはじめて用いたと言われる。^{m)} 未公開の探険資料とともに、彼の旅程記が科学アカデミー誌に発表されることが待たれる。オルデンブルクは、最初のトルファン探険（一九〇九年—一〇年。『目録』第一分冊、五頁）で「取るに足らない」漢文書の山を蒐集した。その一部が N・N・クロトコフ (Krotokov) のコレクションに、その他が S・E・マローフ (Malov) の于闐コレクションに寄託されている（『目録』第一分冊、五頁、一三三頁）。

I

『目録』第一分冊は、紹介（五頁—一三頁）で始まる。その中でメニシコフは、レニングラード文庫の由来を説明した後で、王円籙 (Wang Yuan-lou) という道士が一九〇〇年五月二六日に発見した敦煌の洞窟とその蔵書の来歴を述べている。さらに、メニシコフは、レニングラード文庫を、ロンドン文庫（八一〇—二点。ジャイルズによれば、その内六七九四点が仏教関係文書）および北京文庫（許国霖によれば、約九八七一点で、その内七〇%ほどが仏教関係文書）と比較対照する。この『目録』が収録するレニングラード文庫は、約八〇%（一七四〇点中一四一五点。この数は幾度も数えた結果である）が仏教関係文書で占められる。その多くは經典の漢訳である。『目録』が採用する分類方法は、ジャイルズの『目録』のそれに近い。珍しいテキストが、数はごく限られるが、若干含まれている。それは他の文庫には見当らない類いのものである。テキストの多くは、すでに内容が知られたものである。ただ、誤記と謎めいた筆跡で誰をも苦しめる異文を、一度見てみたいと思われることだろう。『目録』は、フルークが未刊の『目録』に挙げた三〇七点に、文書の説明をそのまま転載した上で、Fⁿ の、その他に D^x (Dun-xuan=Touen

houang) の記号を打っている。各説明は、原則として下記を含む(一〇頁—一三頁)。

——『目録』の番号と、レニングラード・アジア民族研究所 LO 文庫の文書番号(番号の前に "F" もしくは "Dx" の記号を付す)。

——標題および尾題(文書自体に標題のない場合、括弧でくくる)。判明している場合、著者名もしくは訳者名。必要に応じて内容に関する若干の説明。

——テキストに標題のある場合、目録・参考文献の指示。

——外面上の記述。形(卷子、仮綴本、断簡など)、寸法、保存状態、枚数、一枚ごとの行数、行ごとの字数、紙質と色、書体、野の引き方、標題の有無(文頭、文尾、裏面)、蔵書の頭文字〔「卷」や「秩」の整理記号〕、識語と跋(翻訳しないでそのまま転記。年号は読み替え)。

——紙質・書体・野の引き方による大まかな年代鑑定(一—二頁—二—三頁に述べる年代鑑定の基準は、R・H・クラバートンによれば、ジャイルズの『目録』一—二頁とほぼ一致する)。

——テキストの初行と末行(時には二行)の、筆蹟を考慮した臨写(すべて漢字は手書き)。中断符は、行の乱れ、欠字数の不明を示す。四角形は欠字、疑問符は判断不能の文字。括弧は、欠落していても、判読可能の文字を指す。

二本の鉛直線は、二行引用した場合の行末を示す。

——文書がどのコレクション(オルデンブルク、クロトコフ、マローフ)に属すかの指示。その所属は文書に付した記号もしくはコレクションの目録で明らかである。

ロシア語が読めない研究者のために、『目録』の内容を以下に要約する。研究を深めないで偶然取ったメモを付け加えておくことも、無駄とはならないであろう。

紹介（五頁—二三頁）

仏教関係文献（第一号—第一四二五号）

『大藏經』（本来のインド的な意味の）に収められている著述（第一号—第九〇〇号）、すなわち『経』（第一号—第八四三号）、『律』（第八四四号—第八七四号）、『論』（第八七五号—第九〇〇号）。どれに属するかが不明の著述（第九〇一号—一一六一号）。——『大藏經』に収められていない著述（第一一六二号—第一二五八号）。——

その他の様々なテキスト、伝記（第一二六〇号—第一二七九号）。——中国で作られた著述（第一二八〇号—第一四一五号）。すなわち注釈（第一二八〇号—第一二八九号）、偽経（第一二九二号—第一三二四号）、神秘主義的異端的教義（第一三二五号—第一三二六号）、不詳の断簡（第一三二七号—第一三四九号b）。詩（第一三五〇号—第一四〇九号）|| 文（第一三五〇号—第一三六〇号）・讚（第一三六一号—第一三八四号）・陀羅尼（祈禱文・誓願文・追悼文、第一四〇〇号—第一四〇九号）。——仏典の構造分析（「分」・「科」など、第一四一〇号—第一四一五号）。

儒教・道教関係文書（第一四一六号—第一四四二号）

古典〔経〕（第一四一六号—第一四二九号）。——他の道教書（第一四三〇号—第一四四二号）。

歴史と法制（第一四四二号—第一四四五号）

文学作品（第一四四六号—第一五一三号a）

仏跡巡礼の序文（第一四四六号—第一四五〇号）、芸術論（第一四五一号—第一四五五号）、詩（第一四五六号—第一四六九号）、変文（第一四七〇号—第一四八九号）、不詳の物語（第一四九〇号—第一四九九号）、書翰手本（第一五〇〇号—第一五二三号a）。

碑文（第一五一四号—第一五一五号）

習字用の語彙集と資料（第一五一六号—第一六三〇号）

芸術（第一五三一号—第一五三四号）すなわち図画と印章、漢文以外の碑文

医書・曆書・天文書（第一五三五号—第一五四四号）

易書（第一五四五号—第一四九号）

書体の練習帳（第一五五〇号—第一五五九号a）

資料（第一五六〇号—第一七〇七号）

経済関係資料——契約書（第一五六〇号—第一五六六号）、給田と家畜と收穫物の一覽表（第一五六七号—第一五七五号）。商業関係資料——売買と税役（第一五七六号—第一五八一号）。寺院関係資料——諸色入破曆（第一五八二号—第一五八八号）・贈与（第一五八九号—第一五九五号）・その他（第一五九六号—第一五九九号）、証文の登記簿（第一六〇〇号—第一六二七号）。官文書——上表文（第一六二八号—第一六三〇号）、律令（第一六三二号—第一六三八号）、上状訴状（第一六三九号—第一六五〇号）、訴訟（第一六五二号—第一六五三号）、公驗過所（第一六五四号—第一六五六号）、その他（第一六五七号—第一六六二号）。書状（第一六六三号—第一六八四号）。国家表（第一六八五号—第一六九五号）。藏書関係資料（第一六九六号—第一七〇七号）。

付録

アジア民族研究所藏書登録番号と『目録』の番号との符合（六九二頁—七〇六頁）。フルーク未刊目録の番号と『目録』の番号との符合（七〇七頁—七〇八頁）。漢文標題索引（七〇九頁—七二二頁）。人名・地名・若干の漢字の索引（七二二頁—七三七頁）。ロシア語に転写された若干の漢字と文書の特徴に関するデータの索引（七三八頁—七四二頁）——古字体・天文学・漢字・藏書に関する資料、メモ・帖装本・変文・易書・年号・抹消記号・曆、クロトコフ、マールコフ、オルデンブルクのコレクション、医書・漢文以外の著作（ウイグル語、チベッ

ト語、サンスクリットで書かれた十五の断簡)、印章、版刻本(八点)、書翰、書翰用手本、草書、識語駢儷文、朱と墨の記し、修復文書、図画、常用書体、語彙集、表、冊子、カラホト、讚、講經文、藏書票、押座文。標題・人名・サンスクリットの索引(七四二頁―七四五頁)。参考文献(七四六頁―七四八頁)。挿画(多数の文書の断簡から複製した判読可能な16図)。

『目録』には、西側¹⁾と、とりわけ日本の参考文献が大きく欠けている。『大正大藏経』卷八十五は、これまでに刊行された相当数の敦煌文書を収録するものである。これが登場していないばかりか、秋山光和、藤枝晃、入矢義高、神田喜一郎、那波利貞、小川環樹、太田辰夫、その他多くの研究者の不可欠な労作も挙げられていない。王重民(Wang Tchong-min)のすぐれた著『敦煌遺書総目索引』(北京、一九六二年五月)は、残念にも遅れて出版されたために、参照されていない。老大な文献が文書全体もしくはその内の特定の文書を対象として様々な言語で発表されてきた。陳祚龍(Chen Tsu-lung)が現在(一九六四年)パリで作成中の浩瀚な文献目録を入手できない以上、そうした文献を便宜上採用することは、止むを得ない。

基本的なことは、大雑把でも、レニングラード所蔵資料を世に知らせる点にある。アジア民族研究所の研究班が挽回を期す速さでこれに当ったのも、そのためである(レニングラードの目録作成の遅れは、他所に比べれば数倍許されてよい)。世界各国の研究者は、アジア民族研究所に謝意を表するとともに、この見事な労作の続編の発表を待ち望むことであろう。

I

レニングラードの蒐集物は、これまでに明らかかなように、人を驚かすほどの新事実をもたらしてはいない。量的に

も、北京文書や日本文書に勝るが、ロンドンやパリの文書には及ばない。そうは言っても、大変興味深い文書が含まれている。とりわけ俗文学 (sou wen-hue) の分野がそれである。メニシヨフに負う二番目の著作(一九六三年)は、俗文学の一五文書を対象としたものである。そこに十分鮮明な複製写真が掲載されている。序文のはじめにテキストの解題があるが、その翻訳はなされてない。文書は三つの分野、A—「讚」(もしくは「贊」)、B—講經文 (kiang king wen)、C—懺悔文 (tch'an-houei wen) に分かれる。

A. 序文(九頁)によれば、この集成は、レニングラード文庫の番号一八〇〇番までにあったすべての讚と、これに類する文書を収録しており、合わせて一二二点である。

- (1) 「金剛經讚」(*Tsan du Vajrachedika-sitra*) Dx. 296; *Description*, no 1370; pl. p. 25.
- (2) 「十空讚」(*Tsan des dix vacuités*) Dx. 1358; *Descr.* 1372; pl. p. 26-27.
- (3) 「十空讚」(*Id.*) Dx. 922; *Descr.* 1371; pl. p. 28-29.
- (4) 「太子讚」(*Tsan du Prince héritier*) Dx. 1280 a; *Descr.* 1373; pl. p. 30.
- (5) 「五台山讚文」(*Tsan du Wou-tai chan*) Dx. 1009; *Descr.* 1362; pl. p. 31-33.
- (6) a 「海士法身讚」(*Tsan du dharmakya de la Terre pure*)
 b 「往生極樂讚」(*Tsan de la renaissance en Sukhavati*)
 c 「持鳥讚」(*Tsan des oiseaux précieux (de la Terre pure)*)
 d 「蘭若空讚」(*Tsan de la vacuité à l'aranya*) Dx. 883; *Descr.* 1361; pl. p. 34-37.
- (7) 「海士法身讚」(*Tsan du dharmakya de la Terre pure*) cf. 6a, Dx. 1047; *Descr.* 1376; pl. p. 38.

- (8) 「児出家讚」 (*Tsan du fils qui sort de la famille*) Dx. 109; *Descr.* 1365; pl. p. 39.
 (9) a 「金剛五札」 (*Les cinq hommages au Vajra*) *Descr.* 1401.

b 「涅槃讚」 (*Tsan du Nirvāna*) *Descr.* 1364.

c 「出家讚」 (*Tsan de la sortie de la famille*) ㊸㊹同文° *Descr.* 1364. F. 176; pl. p. 40-41.

- (10) 「南宗讚」 (*Tsan de la secte du Sud*) F. 171; *Descr.* 1363; pl. p. 24.

(11) 四〇の「偈」 (*gāthā*)。これは普賢菩薩 (Samanrabhadra) と文殊 (Mañjuśrī) に加護を祈る偈である。他の偈は欠落してゐるが、それは觀世音 (Avalokiteśvara) と弥勒 (◌) に加護を祈ったものである。Dx. 144
Descr. 1381; pl. p. 43.

- (12) a 「入山讚」 (*Tsan de l'entrée en montagne*)

b 「五台山讚文」 (*Tsan du Wou-tai chan*)

c 尾題を欠くテキスト末尾

d 「長安詞」 (*Poème sur Tch'ang-ngan*) Dx. 278; *Descr.* 1369, 1184 ...; pl. p. 44-47.

B. 講經文の標題は「大乘」八關齋戒文」 (*Ta-tch'eng pa kuan-tch'ai kai-wen*) である (Dx. 109; *Descr.* 1471; pl. p. 48-60)。ただし「大乘」の語は、尾題にのみ登場する。八戒とは、(1)殺生をしない、(2)盗みをしない、(3)性關係を持たない、(4)嘘をつかない、(5)酒を飲まない、(6)裝身化粧、歌舞を聴視しない、(7)高い床で寝ない、(8)午後は何も食さない、ことを言う。元々これは小乗の戒めであり、月六度の齋 (*upavasa*) に一昼夜これが在俗に求められる。メニシコフはこの戒文を講經文と見なす。しかしそれがどの『經』にあるのかは、明らかでない。漢訳大藏經に『八關齋經』(『大正藏』第八十九番)があるが、それは『中阿含經』の契經の一つ(『大正藏』第二十六番、二〇二、七七

○頁 a—七二頁 c) を別訳 (pie-jr) したものである。その他にも二つの別訳がある (『大正藏』第八十七番、第十八番)。標題 (一五行目) の下に『八関斎経』略出』という注記があっても、それはいずれもレニングラード文書というところのものではない。経文は、『経』の引用明記も後文を続けることもなく、經典から単に抜き出されたものと解すべきであろう。この点が敦煌文書の多くの講経文と相容れないところである。もっとも『経』名不詳の「八関斎戒文」がバリにあることはある。レニングラード文書が講経文であることは、標題に続く詩形式の押座文 (y-sse zen) の冒頭に「作梵而唱」(インド風の詠唱) という文言があることで確認される。メニシコフは、これまでいかなる講経文も発表されたことがないと述べている (一四頁)。しかし九三三年、後唐の明宗 (Ming-tsung) の誕生日に開封 (K'ai-fong) 宮で説かれた偽経『仁王般若経』の講経文がある。向達 (Hsiang Ta) がこのテキスト (バリオ文書第三八〇八号) を二度にわたって発表している。

C. 「八種鹿重犯墮」(F. 221; Descr. 1265; pl. p. 61-66, lignes 1-73) と題する懺悔規則文の前半は、馬鳴菩薩 (… Asvaghosa) の作である。「馬鳴菩薩造」とは、数世紀間著名な作者の名を冠してきた長大な著作表にさらに付け加えたものである。付加文はなんと馬鳴の師・先達とされる聖天菩薩 (… Aryadeva) に対する祈願で始まる。ついで鹿重犯墮の意味が馬鳴作伝の偈と「インド産」として付け加えられた範例の助けを借りて説明される。短い結論で鹿重犯墮の対治法として勧められるのは、「集輪」内の御「本尊」(pen-tsouen, tsindewutz) の前で懺悔することである。集輪こそ曼陀羅に他ならない。

同一文書 (F. 221; Descr. 1266; pl. p. 67-68, lignes 73-94) に、別の懺悔規則文が続く。内容はかなり解かりにくく、標題「常所作儀軌八種不共」の意味も明らかでない。作者は吉祥形魯剛 (Ki-siang-hing-lou-kang, Sri… vajra) という不詳の人物であるが、それはメニシコフが考える漢代の翻訳者安世高 (Ngan Che-ka) ではない。

この苦心の作品は、今度は馬鳴に関する奇妙なテキスト (*ib.*; *Descr.* 1267; pl. p. 68-73, *Iignes* 95-163) を伴う。それは悪筆を極める上に、風変りな名前で満ちている。このテキストは、鳩摩羅什造『馬鳴菩薩伝』、『大正藏』第二〇四六番)、祖師外伝集の『付法藏因縁伝』 (*Fou fa-tsang yin-yuan tchouan*, 『大正藏』第二〇五八番)、『大乘起信論』の偽注釈『釈摩訶衍論』 (*Che mo-ho-yen loun*) と何んら関係していない。もっとも『釈摩訶衍論』に、ヴィンヌの垂迹 (*Avatar*) である六人もの相異なる馬鳴菩薩が登場している。

終行に「馬鳴之像」という文字が判読できる。メニシコフによれば、この像は足元に横たわる男性とともに上半身裸の女性を表現している (二二頁)。像全体が墨のにじみで汚れている。そのことは、結髪を別にすれば、複製画においてさほど問題ではない。結髪は、女性もしくは祖師の姿よりも、むしろシャクチ的な姿を連想させる。その上の文書全体にはシャクチ主義が多かれ少なかれ浸み込んでいるようである。この点は、馬鳴菩薩作の他の中国偽経の場合も同様である。

文書は違反の際の罰則に関する無標題の短い詩で終わる (pl. p. 73; *Iignes* 164-167)。メニシコフ (二二頁—二二頁) によれば、右頁 (複製転載されず) に年号を記さぬまま八世紀の翻訳者数名を挙げた大乘の経典目録がある。メニシコフは、それが唐代に出版された教種の大蔵経目録の一つではなく特定の蔵書目録であり、しかもこの種の目録は八世紀以降に用いられたと考える。文書の反対側に書かれたテキストにしては、かなり後世の日付を含むからである。この日付は確かなものと思われる。しかし目録中の紙数・束数の指示が必ずしも蔵書目録であることを意味しているわけではない。こうした指示は、唐代の官製大蔵経目録にしばしば見られるからである。

III

変文 (*bian-wen*) に関する本書は、変文について内容豊かな長い序文で始まる。変文は、敦煌出土文書中、最大の

発見物の一つである。出版・研究の歴史、テキストの一覧表、参考文献（五頁―一四頁）は、中国側の資料を用いてよく考証されている。しかし日本や西側の情報については不十分である。特にテキストの語彙（一四頁）に関して、現在変文の第一人者である入矢義高の名があがっていない。また、A・ウェイリー (Waley) や、変文の語彙と多くの類似点を有する仏教的「語録」に関する日本の語彙集もあがっていない。本書では、変文の起源・変遷、説話文学・戯曲文学史上で変文が果たした役割、変文の形式・主題・作詩法、変文という言葉の意味が明らかにされている。それは、実に徹底した仕方ですべて文献資料を蒐集・分析したすぐれた中国人研究者、鄭振鐸、向達、孫楷第 (Suen Kai-tai) の成果に負う。従ってここに初めて西側の出版物を出すに当たって、これらの確かな手引（一四頁―一五〇頁）に従いさえすればよかった。本書に収録・翻訳された変文の文書は、合わせて三点である。

- (1) 「維摩碎金」 (*Wei-mo souei-kin*) と題する『維摩經』の変文断簡 (F. 101; *Descr.* 1473; pl. 5-18; trad. p. 69 -102)

この断簡は、五メートル一七センチの長卷子で、首部を欠くものの、一九紙二七九行を含む。これは、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』「仏国品第一」(『大正藏』第四七五番卷上、五三七頁 B₅-C₅) の一四行を対象とする。メニシコフの指摘 (三五頁) の通り、尾題のある唯一知られた変文文書である。『維摩經』は、中国の文化的伝統の中に真に引用されるにふさわしい数少ない仏典の一つである。「維摩碎金」という尾題は、それを中国俗語を用いて見事に増幅したものであろう。変文 (詩の交った散文) 形式の増幅は、中国でもその前例を見なかった。毘仏略 (*paifubue*) の規模 (数十巻) を正直に語らないで、インドから着想を得て物語を活気づける増幅の仕方も同様である。

文尾に、まず「靈州龍興寺講經沙門匡胤記」という識語があり、その後同一人の手になる無署名の識語がある。メニシコフはこれを概ね次のように訳す。「原宗 (Yuan tsong) の性急な勧めで、私はここへ休息に来た。そして教

S. 4571	T. 475, i, 537a ¹ -b ²⁴	(Ch. I)	Tsi p. 517-560
F. 101	T. 475, i, 537b ²⁵ -c ⁹	(Ch. I)	
S. 3872	T. 475, i, 538a ¹⁵ -b ²⁹	(Ch. I)	Tsi p. 562-587
P. 2122	T. 475 ?	(Ch. I-II?)	Tsi p. 589-591
P. 2292	T. 475, i, 542a ²⁷ -543a ⁹	(Ch. IV)	Tsi p. 592-619
F. 252	T. 475, i, 543c ¹⁻⁷	(Ch. IV)	
P. 3079 ⁵³	T. 475, i, 543a ¹¹⁻¹⁹	(Ch. IV)	Tis p. 620-633
Ms. Lo Tchen-yu	T. 475, ii, 544a ²⁸ -b ⁸	(Ch. V)	Tsi p. 634-645

S=スタイン文書, P=ペリオ文書, T=『大正蔵』, Tsi=『敦煌変文集』

日間でこの著を書き終えた。私が僧であることから、人は誰も私を引き止めようとしなかった。朔方積家(派?)。従って宋朝始祖の太祖 (T'ai-sou) が匡胤 (K'uang-yin) という本名を記している点から、文書は宋代以前のものである。他面から見れば、文書は龍興寺 (Long-hing ssu) 創建の年、七〇七年以降に書かれたものである。靈州

(Ling-tcheou) は、敦煌を遠く離れた現在の寧夏 (Ning-hia) (Ling-wou) のことである。

(2) 同一作品の一部である無標題のもう一つの断簡 (F. 252; Desr. 1474; pl. 19-28; trad. p. 103-125)

この断簡は三メートル二三センチの長卷子で、首部と末尾を欠き、一〇紙一七七行を含む。これは、『維摩経』「菩薩品第四」の七行(『大正蔵』第四七五番巻下、五四三頁C)に相当する。ただしこの文書は先と同一人物の手で書かれたものではない。メニシコフ(五一頁)によれば、テキストは九世紀の第一四半期以前に遡るものではない。それは、楊貴妃 (Yang Kouei-fei) を指すのに王妃 (Yu-fei) の呼称が使われており、この呼称は陳鴻 (T'chen Hong) の『長恨歌伝』(T'chiang-ken ko tchuan) で、この時代にしか登場していないからである。ともあれ、この呼称は韋渠牟 (Wei K'iu-mou) の詞(詞⁵⁴)です。すでに確認されている。彼は七四九年から八〇一年にかけて

生存した。

これら二つの文書は、既知の『維摩經』変文文書の中に、次のような仕方で挿入される。表に見る通り、レニングラードの断簡は、『維摩經』一四品中の二品(第一と第四)に相当する変文を補充する。最初の断簡は、ちょうどロンドンの断簡に続く。『維摩經』変文の他の部分が所々に散在する文書の中で確認されるとよい。まずは本書に集録されなかったレニングラード文書(Dx 第六八四号⁵⁶)から始めるべきであろう。

(3) 「十吉祥」(*Che ki-siang*) に関する変文 (F. 472; *Descr.* 1472; pl. 29-35; trad. p. 126-136)

断簡は、無標題の二メートル六〇センチの長卷子で、四紙九四行を含む。テキストにある「吉祥」の語は、この菩薩の生誕に際してあらわれる十の吉兆を意味する。特に中国では、北部仏教の中心的靈場(帝都の住民にとって)が五台山 (*Wou-tai chan*) に置かれたことから、中唐の頃より流布した。各吉兆は、それぞれ詩の交った散文で説明され、はじめに文殊らの名を、終りに詩と散文交りの一種の結びを付す。この詩は正規の詩音いわゆる律詩 (*schèmes tonologiques*, p. 58-59) に合わせた七言八句であり、変文としては例外的なものである。厳密に言えば、これは変文ではない。変文とは、もっぱら仏教的な形式のもとに正規の經典を増幅することである。ここではそうならない。かなり後世の著述年号を記す文脈の六二行目に、六九〇年から七〇四年にかけて在位した則天武后 (*T'impératrice Ts'o-t'ien*) の名が見える(一六三頁註45)。

本書は、F. 101, 253 (一七七頁—一九〇頁) と F. 223 (一九一頁—一九五頁) から拾い出した極めて有益な異体字表で終わる。著者は異体字のことを緒言(一六九頁—一七〇頁)で紹介している。これらの覚え書は、とりわけ異体字の判読にとって有益な参考資料を挙げている。また表の星印は、覚え書の参照を指示するものである。

【文獻】

I.—I. M. VOROB'EVA-DESJATOVSKAJA, I. S. GUREVIČ, L. N. MENŠIKOV, V. S. SPIRIN, S. A. SKOLJAR, *Opisanie kitajskix rukopisei Dun'xuan'skogo fonda Instituta narodov Azii*, L. N. Menšikova, 774 p., 16 pl. h. t. (fac-similés); 2r. 20 kop. [「ソビエト民族研究所蔵敦煌文庫漢文書目録」第一分冊「主任編者メロニコフ」]

II.—*Kitajskie rukopisi iz Dun'xuanu. Pamiatniki buddistskoj literatury suven'sjuz* Izdanie tekstov i predislavie L. N. Menšikova. Akademiya nauk SSSR, Institut narodov Azii. Pamjatniki literatury narodov Vostoka, Teksty, Bolšaja serija, XV, 73 p. (dont 48 de fac-similés), 2p. de titre en chinois; 70 kop. [「敦煌漢文書「仏教文書(俗文学)遺集」テキストの収録メロニコフの序文。ソビエト科学アカデミー・ソビエト民族研究所刊「東洋民族文学遺集」全集第一五巻(所収)」]

III.—*Bian'ven' o Vėmotsza. Bian'ven' "Desat' blagix znamenij"*. Neizvestnyje rukopisi bian'ven'iz Dun'xuan'skogo fonda Instituta narodov Azii. Izdanie teksta, predislavie, perevod i kommentarii L. N. Menšikova. Ak. n. SSSR, Inst. nar. Az. Pamjatniki literatury narodov Vostoka, Teksty, Malaja serija, VIII, 195 et 35p. (31 pp. de fac-

similés); 90 kop. Moscou, 1963. [「維摩經の変文「十吉祥」ソビエト民族研究所蔵敦煌文庫の未刊漢文書「テキストの収録」メロニコフの序文・訳・解説。ソビエト科学アカデミー・ソビエト民族研究所刊「東洋民族文学遺集」選集第八巻(所収)」]

【原註】

- (1) V. M. Alekseev, Les fonds chinois et coreens, dans *Le Musée asiatique de l'Ac.d. Sc. URSS, Revue des sciences*, St. Pétr.
- (2) S. F. Oj'denburg, Les grottes des Mille Buddhas, dans *Vostok*, II, p. 57-66.
- (3) P. Pelliot, *T'oung-Pao*, XXVIII, p. 165-166. *ibid.*, XLVII, p. 429.
- (4) K. K. Flug. Bref aperçu de la partie non bouddhique du fonds de manuscrits chinois de l'Institut d'orientalisme de l'Ac. sc. URSS, *Bibliografija Vostoka*, 1934, vii, p. 87-92; Bref inventaire d'anciens manuscrits bouddhiques en langue chinoise de la l'Institut... *ibid.*, 1935, viii-ix, p. 96-115.
- (5) K. K. Flug, *Histoire du livre imprimé de l'époque des Song*, 1957. cf. *T'oung-Pao* XLVII, p. 490. Sauerlich 著 „Mélanges Haenisch“, *Studia Sino-Altaica*, Wiesbaden, 1961 ㄱㄱㄱ 著 ㄱㄱㄱ ㄱㄱㄱ

- (6) 陳垣『敦煌劫餘錄』(北京、一九三二年)
- (7) *Livraison, I, p. 5. ibid., II, p. 5.*
- (8) 五月二六日はむしろ六月二日のことであろう。秋山光和『美術研究』第一八七号、一九五六年六月、四頁注(1)参照。敦煌の「卒塔婆」から一八二七年頃に將來した唐代文書が流布していた。神田喜一郎『エプソリカ』第五卷、奈良、一九五五年十月、二四頁参照。
- (9) 第八二三号(三二〇頁)は、'ロホンから帰義節度使張公 (*Kouai-yi k'iao-tou-che Tchang*) の命により、九〇二年に書写されたものである。この張公は、『目錄』が推測するように、八七二年に没した張義潮 (*Tchang Yi-tch'ao*) ではなく、八九〇年に任命され九〇五年まづこの名を称した張承奉 (*Tchang Tch'eng-fong*) である。cf. *Huang Ta dans Mélanges sinologiques (Centre d'études sinologiques de l' Université de Paris à Pékin) 1951, p. 12-14 = T'ang-tai Tch'ang-ngan yu Si-yu wen-ming, Pékin, 1957, p. 425-426.* 藤枝晃論文『東方学報』第三十五冊、京都、一九六四年、八七頁。
- (10) 第九一九号は、鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』(『大正蔵』第四七五番卷上、五三八頁^{a1}—五三九頁^{a2}) の一節である。
- 第九五〇号は、義浄訳『弥勒下生成仏経』(『大正蔵』第四五五番、四二六頁^{Ba1-c22}) である。
- 第一〇〇二号は、『長阿含経』(*Dighāgama*, 『大正蔵』第一一番卷第七、七三頁^{Ba1-c22}) の一節である。
- 第一〇〇四号は、『大品般若経』(*Ta-p'in pan-fo king, 二万五千頌*) ではなく、龍樹の注釈『大智度論』(*Ta tche-tou louten*, 『大正蔵』第一五〇九番卷下、七五三頁^{a20-Ba}) である。ただし初行と特に末行は誤訳である。
- (11) 五四文書が『仏名経』(*Fo-ming king*)、二九文書が『大乘無量寿経』(*Ta-tch'ang wou-leng-chou king*)、二二文書が『八陽神呪経』(*Pa-yang chan-tchou king*) である。これらの文書はとりわけ書写に値打ちのあるテキストである。
- (12) 『目錄』に引用された第一三二五号—第一三二〇号の文章(『父母恩重経』*Fou-mou ngen-tchong king*) は、ペリオ文書第二四一八号にも、北京文書何12(同一テキストに属す)にも見られない。ペリオ文書第二四一八号の四四二行目の尾題「誘俗第六」には、九二七年の書写年号がある。その約半分は、『父母恩重経講経文』である(那波利貞が『甲南大学仏教学会論集』第二号、神戸、一九五五年、三〇頁—四四頁に収録した)。那波利貞は、この講経文に用いられた『経』を孝行を論ずる大蔵経(『大正蔵』第一五六番、第一五九番第二品、第六八七番、他)中に捜し求めたが、それは徒勞に終わった。『父母恩重経』は明らかに偽經であり、中国、朝鮮などで重宝された。その多数の異本については、道端良秀の論文(『印度学仏教学研究』第一卷二号、一九五三年、二七九頁—二八六頁、下記註(8))を参

照のり。

(13) 第一四三〇号—第一四三一号は、『本際経』(Panti-king)二品の断簡(約五〇行)を含む(吳基昱編『本際経』パリ、一九六〇年、二頁—三頁。王重民『繪目索引』三九二頁参照)。これは他には見られないようである。第一四三二号の終訳が吳基昱の編纂した無標題の一品の二断簡(一五四頁b—一六〇頁a、一九七行目—二二五行目)にある。

(14) 第一四四五号は、『唐律疏義』(T'ang-lu ch'ou-yi)の残簡(一三行)である。

(15) 第一四四九号は、仏護(Buddhapāli (ta))の『中論注』(Uśīsa-vijya-dharaṇī)を漢訳するために六八九年に書かれた作者不詳の序(『大正藏』第九六七番、三四九頁¹⁶、²⁶)の断簡である。ラモットは文殊に関する論文(T'oung Pao, XLVIII, 1960, p. 87^{aa}-88^b)の中でこの断簡を仏訳した。P・ドミエヴィル『ラサの宗論』I、三七六頁、およびスタイン文書第四七五九号、第六一二二号参照。

(16) 第一四五三号と一四五四号が賦(ou)として分類される理由は明らかでない。第一四五三号は、『武王家教』(Wang-kuang kia-kiao)と題する稚拙な詩で書かれた啓蒙書の断簡である。このテキストは、『太公家教』(T'ai-kong kia-kiao)もしくは『呂尚家教』(呂尚 Lu Chang は周の武王の師)の写本に続くものである。その完本も現存する。『目錄』に引用された行は、私が講義で取り上げたヘリオ文書第

二八二五号、第三七六四号の中にある(Annuaire du Collège de France, 1960, p. 319)。ところが、この断簡が『武王家教』に属すると考えられるにもかかわらず、そこには第一四五四号の引用文が見当たらない。王重民は『太公家教』に関する研究(Han-hsiue, Bulletin du Centre d'Études sinologiques de Pékin, II, iv, Pékin, 1949, p. 355-362 = 『敦煌古籍叙録』北京、一九五八年、二一九頁—二四四頁)の中で、『武王家教』を付録したりしなかったりする『太公家教』の一九文書に言及した。これらのテキストは、銘記法用の四音綴もしくは六音綴の詩句で書かれており、子どもの躑けに用いられた。これらは、宋代以降の『百家姓』(Pai-kia sing)に取って代わられるまで、広く流布していた。入矢義高は一二のロンドン文書にもとづいて『太公家教』(『武王家教』を付さず)の校訂文を、福井博士頌寿記念『東洋思想論集』(東京、一九六〇年、三一頁—六〇頁)に発表した。

(17) 第一四五六号は、王梵志(Wang fan-chih)の詩の断簡(三紙、二六字×一〇七行||約二七八二字)である。七七年の書写人のコロホンを付し、標題は「王梵志詩一百一十首」である。これは王梵志の作詩年代のうち、最も古い作詩年代をさらに遡らせようとする人もいるが、大半は八世紀後半に位置づけられる。 Cf. Annuaire du Collège de France, 1957, p. 354-357; 1958, p. 386-391; 1959, p. 437-438. 入矢義高『中国文学報』第三号、京都、一九五五年、五

○頁一六〇頁、第四号、一九五六年、一九頁一五六頁。神田博士還暦記念『書誌学論集』京都、一九五七年、四九一頁一五〇一頁参照。私は王梵志の詩、二十数文書を写真に取った。その内の数点が九三〇年から九七八年にかけての年号を有している。これらの詩は、明らかに二つのジャンルに分かれる。一つは、程度の差こそあれ哲学的なジャンルの約五三〇首（四行詩、六行詩）で、正式に編せられた三巻に属し、『王梵志詩集』を構成している。もう一つは、格言的啓蒙的なジャンルの、五音節詩風の四行詩九二首であり、巻号はない。いずれの文書にも、『目録』が引用するレニングラード文書の初行と末行が見当らない。『目録』は、二首が八十番、百番の記しを付されているところから、レニングラード文書が六七番から始まると判断している。この点を考慮に入れば、全体で二七八二字、（一一〇一六七）四四首から、一首の平均は六三字となる（これは五音節詩風の四行詩三首に相当する）。ところでロンドンの二文書に登場する作者不詳の序に「王梵志の詩集は三百余首を数える」とある。『目録』に引用された二行だけでは、レニングラードの断簡がどのジャンルに属するかは、判断できない。しかしそれは哲学的な作品の方に属しているように思われる。それ故、この断簡は、唐代からわれわれが手にする「通俗」詩の内、最もすぐれた詩集の一つを補完するといつてよい。それとともに、首 (*chaou*) という語の意味が一層よく理解されるであろう。「通俗」詩は、寒山詩以上

に興味をそそるものである。メニシコフがこの興味深いテキストを複製掲載しなかったことは、残念である。

第一四六〇号は、「呪願新郎」の句で始まる（「況」ではない。誤りが索引で訂正されている。三四四頁参照）。これは、『目録』の通り、力・智慧・富・すぐれた子孫を願う一三行のテキストである。スタイン文書（第六二〇七号、ジャイルズ編号Ⅱ第六二八九号）に同じ標題のテキストがある。またウェイリーが "Marriage songs" と題して発表した「下女」詞 (*Hia niu [fou] ts'eu*) の数文書の末尾に、この種の「願」が見られる (Waley, *Ballads and stories*, p. 189-201)。王重民によれば、敦煌文書には多くの「願」が見られるという（『敦煌变文集』二八四頁註92）。私は「下女」詞の七文書のコピーを持っている。その内の三文書はそれぞれ相異なる願文を伴うが、いずれも『目録』に引用された行を含まない (Annuaire du Collège de France, 1960, p. 319)。私はレニングラードの敦煌文庫が婚礼の詞を含むと見ているが、これがそれに当たるか否かは分からない。

⑩ 第一四七〇号は、『大方便仏報恩経』 (*Ta fang-pien fo pao-agen kin*) の講経文の長い断簡（四九紙）である。『目録』に引用された行は、後漢の失訳人名本に対応する（『大正藏』第一五六番、一二四頁^{a1}、一四三頁^{a2}、一四五頁^{a3}）。王重民は『総目索引』（三六一頁）で『経』の名しか挙げていない。上記註12を参照のこと。

第一四八一号(図8は、七五〇頁の一覽表で誤記されている。第四七二号がそのことを証明する)は、孔子(Confucius)と項託(Hiang T'o)との対話録の断簡である。全体で二冊の仮綴本である。テキストは、約1/3が『敦煌変文集』(二二二頁四行目―二二三頁一行目、二三四頁六行目―二三五頁三行目)と一致する。これをソワイニエ(Soywie)が二二文書(チベット本、モンゴル本、シャム本など)と校合して、仏訳してあげ(M. Soywie, *J.A.*, 1954, 3-4, p. 311-392)。王重民は、このテキストが敦煌文書中数の多さで俗文学の代表格であると述べている(『敦煌変文集』二三六頁)。それはかなり疑わしい。

第一四八二号は、『舜子變』(*Chouen-tsu pien*)の断簡(不備な十行)であり、『目錄』によれば、王重民本(『敦煌変文集』一二九頁―一三五頁)には見当らないテキストである。しかし『敦煌変文集』(二二二頁)に「打舜子」の語を見る。これはレニングラード文書の末尾である。王重民本は数行しか欠落していないはずの三文書に依る(前掲書、一三五頁註8)。金岡照光は一文書(ペリオ文書第二七二二号)だけを底本として、テキストに関する緻密な研究を付して校訂本を発表した。(Proceedings of the Kuruyama Oriental Research Institute, II, Yokohama, 1956, p. 167-190)° cf. *Annuaire du Collège de France*, 1953, p. 222.

第一四八五号(一八行)は、文尾が五音節詩でできた

「入冥記」の断簡であり、八行詩二首を含む。この引用文はいずれも『唐太宗入冥記』(*T'ang T'ai-tsung ju-ming ki*, これは、詩句を含まなから『目錄』の言うように、変文ではない。『敦煌変文集』二〇九頁―二一四頁、Waley, *op. cit.*, p. 167-174)にも、『目連変文』(*Mou-lien pien-wan*, これにはわずかながら、五音節詩がある。前掲書、七〇一頁―七五九頁)にも、また散文の『黄仕強伝』(*Huang Che-kiang*, 四文書が知られる)にも、見られる。

第一四八九号は、天子や皇太子が臨席する祝宴を描く変文の断簡(一四行)であり、沙州(Chachou)・玉関(Yu-kuan)等々が出てくる。引用文は、張義潮の変文にも、後継者の甥張淮深(Chang Houai-chen)の変文にも見当らない(前掲書、一一四頁―一二七頁)。

(9) 第一五一四号は、三紙(五九行)の不備な卷子である。尾題によれば、『楞伽經』の漢訳者求那跋陀羅(Gunabhadra, 394-468)のために梁武帝(Liang Wou-ti, 465-549)が草した碑文であるという。碑文は求那跋陀羅を中国禅宗派第一祖と記す(『目錄』に言うように第二祖ではない。第二祖には文末で惠可 Houei-ko を當っているからである)。このような祖師図は楞伽宗に属す。しかしこの派の燈史は、求那跋陀羅伝(浄寛『楞伽師資記』七二七年頃作。『大正藏』第二三八七番、一二八三頁―一二八四頁)の中で、梁武帝の碑文の件を何も触れていない。ま

た、『目録』に引用された数節も、ここには見当たらない。さらに『楞伽師資記』が言う中国第二祖は、菩提達摩であって恵可ではない。「この註に対して柳田聖山先生より、『碑文は武帝がダルマのために書いた作品で、『宝林伝』が最古でしよう』との指摘があったが、今は原文に甘んずることとした。—訳者」

- (2) B・L・スミルノフ (Sminov) と I・T・ゾーグラフ (Zograf) が『目録』の索引を作成した。漢字は、コロコロフ編『漢露辞典』(Ogiz, 1935) と オンジャーニン編『漢露辞典』(Moscou, 1935) が用いる『Vasil'ev-Rosenberg』法に依って分類されてくる (cf. III p. 169-170)。この方法は、O・ローゼンバーク (Rosenberg) が『仏教研究入門』(Introduction to the study of Buddhism, Part I, vocabulary, Tokyo, 1916) で用いた『Optical termination』法を完成させたものという。それにしても、どの点がそうなのかは不明である。私が『目録』の索引にローゼンバークの原則を用いる分類法の発案者を度々批判したのも、当時今だ時代遅れでなかったローゼンバークの仏教語彙集を利用している、その原則に随分と悩まされたためである。
- (3) A. Waley, *Ballads and stories from Tun-huang*, 1960. 『目録』は二四枚の讀を挙げてくる。その中にペリオ文書の極めて豊富な敦煌の真貌讀 (chen-mao tsan) が一つも載っていないのは驚きである。
- (4) 『目録』によれば、この「金剛經讀」はどの敦煌文書文

献にも見当たらないものという。しかし王重民は同一標題の二文書(スタイン文書第五四六四号、ペリオ文書第三六四五号)に言及している(『総目索引』四四〇頁)。

- (4) 王重民が八文書を挙げたのに対して『目録』は、他の蒐集本中の「十空讀」の二文書にしか触れていない。参考文献の不十分さをことさら言うつもりはない。今は、王重民の『総目索引』を参照すればよい。

- (5) 下記註(6)を参照のこと。この文書は、ペリオ文書第三五六三号(那波利貞、前掲書、一〇頁—一一頁)、北京文書鹹十八(許国霖編『敦煌雜錄』上海、一九三七年、七五頁)、ペリオ文書第四六〇八号にもとづいて私が校訂した文の冒頭部、約1cに当たる。cf. *Annuaire du Collège de France*, 1956, p. 290.

- (6) この標題は、王重民の『総目索引』に欠けてくる。
- (7) 『目録』によれば、「金剛五礼」は『Andra』のことである。それはむしろ『金剛般若經』(Vajracchedikā)のことであろう。

- (8) このテキストは、いわゆる「五更転」(wou-king tohwan)の曲子形式をとる。ロンドン文書(スタイン第四一七三号)、ペリオ文書(ペリオ第二九六三三号)、北京文書(周七十)にその類似文がある。後二文書にもとづいて任二北(Jen Bul-pei)が「南宗讀」を『敦煌曲校録』(*Touen-houang K'iu kiao-lou*, 上海、一九五四年、一二三頁—一二五頁)に収録している。レニングラード文書は貴重な異文

- を含む。メニシコフがパリ文書を底本とする劉復 (Léon Fou) 本との比較から、この点を指摘した。終句にパリ文書では「一年川」、ロンドン文書では「一連全」とあるが、任二北はこれを「一連川」と訂正した。しかし、レニングラードの「一言詮」という読み方の方が適切である。この作者不明のテキストは、神会 (Chen-houai, 670-762) が著わした同一標題、形式の二文書と混同されるべきでない。cf. P. Demiéville, *Deux Documents de T'ouen-houang sur le Dhyanā chinois*, 『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』一九六一年、四頁〔拙訳』『神会語録とチベット宗論』『禅学研究』一九八一年、一三二頁〕。胡適論文『董作賓記念論集』中央研究院刊、台北、一九六〇年、二二頁—二三頁。 *Annuaire du Collège de France*, 1963, p. 331-332.
- (29) 「入山讚」は「好住娘、且須節僧戒伴……」が初句である。家に残す母親のための祈願は、敦煌文書にいくつも見られる。「好住」(*hao-tchou*) という表現を、唐代の詩人が用いるのも、通常この意味においてである。張相『詩詞曲語辭匯釋』上海、一九五四年、六九三頁にある貴重なリストを参照のこと。唐代の詩人は俗語をよく使う。それ故、この文献が『目錄』のどこにも引用されていないのは驚きである。レニングラード文書は、ペリオ第二七二三号(劉復編『敦煌掇瑣』北京、一九二五年、四二二号)、ペリオ第二九一九号(那波利貞、前掲書、一一頁—一二頁)、北京文書乃七四(許国霖、前掲書、七三頁)、ロンドンの三
- 文書(スタイン第一九号、第四一七五号、第六六三二号)などにある。「(楽) 入山讚」「辞娘讚」と題する文の一部に対応する。任二北が三文書にもとづいてこの校訂本を発表した(任二北、前掲書、九八頁—一〇二頁)。レニングラードの断簡は、この文献の九九頁最初の五行に相当する。
- (30) このテキストは、上記註(29)と同一であり、冒頭の敷衍である。
- (31) 「(楽) 住山」のくりかえしを伴う(「……(楽) 住山、未得成仏不帰還(楽) 住山……」)。「(楽) 入山」の曲が登場する(「(楽) 入山讚」に、この一節は見られない(上記註(29))。
- (32) このテキストは悪筆で書かれており、一部を抹消している。帝都から持ち出されたものようである(二四行は、各三〜四字である)。
- (33) 八関斎 (*pa kouan-tchai*) とつう語は、ペーリ語の *«ai-ihanga samannāgata uposatha»* 簡略化して *«ai-ihangika uposatha»* である。「関」はこの場合、「閉ざす」「排除する」の意である(望月信亨『仏教大辞典』一〇八八頁c。織田得能『仏教大辞典』一四〇一頁a)。制度については、望月信亨、前掲書、四二〇七頁—四二〇八頁参照。また、cf. E. Lamotte, *Le Traité de la grande vertu de sagesse*, II, Louvain, 1949, p. 825 sq.
- (34) ペーリ語の対応文については、次を参照のこと。 *Visākha-suttanta de l'Anguttara-nikāya*, VIII, 43, vol. IV, p. 205-215.

- (35) それはペリオ文書第三二三三五号の裏面にある。この文書はレニングラードのテキストとかなり異なり、やや長い文である。これに押座文はない。
- (36) 「梵」は「梵唄」「梵音」のかわりである（『法宝義林』『梵唄』の項参照）。従って、「香を焚へ」(cažeć kurjanja) ことではない。「作梵」という表現がペリオ文書第三八四九号の裏面（向達『唐代俗講考』Ⅲ、一九四四年、四五頁）およびペリオ第三七〇号の俗講手続に見られる。この語は田仁『入唐求法巡礼行記』（E. O. Reischauer, *Emiri's Diary*, New York, 1955, p. 54, n. 234）にも見られるが、意味は問題にならない。
- (37) 「唐代俗講考」五二頁―五八頁。『敦煌變文集』四一―頁―四二四頁。よく似た講が、九二六年十月十八日のコロンを有する『旧武帝史』（Kisou Woutai sho）卷第三十七、二頁^a（一八八八年）の別記にある。
- (38) 鹿重 (Is'ou-tchong) は、元來サンスクリットの《*dan-sihalya*》である。しかしここでは《*stihalyaya*》から派生した語である。
- (39) 「しばしば犯される甲乙つけがたい八種の違反」(「儀軌」を『rituel』と訳すのは不適当かもしれない)。
- (40) 悪筆とはいえ、メニスコフが言うような十二祖をここに認めることはできない。
- (41) 『大正蔵』第一六六八番卷第一、五九四頁b―c。
- (42) P. Demiéville, Sur l'authenticité du 'Ta-t'ch'ang k'i-sin louan, *Bulletin de la Maison Franco-Japonaise*, II, 2, Tôkyô, 1929, p. 14, 63. また林藜光『正法備忘録』ニリ、一九四九年、三〇七頁参照。
- (43) P. Demiéville, Les Versions chinoises du *Mihindapariha*, BEFEO, XXIV, Hanoi, 1924, p. 14, n. 5 et le tableau 2 a la fin. cf. ib., p. 20 et n. 2.
- (44) 入矢義高『敦煌變文集』口語語彙索引（一九六一年）にある話し言葉の索引は、入手可能な最も有益な文献である。
- (45) 『敦煌變文集』に關するウエイリーの覚え書 *Studia Serica B. Karlgren dedicata*, Copenhagen, 1959, p. 172-175.
- (46) 篠原寿雄『禪語解説辞典索引』東京、一九五九年。太田辰夫『祖堂集口語語彙索引』一九六二年。無著道忠『葛藤語彙』駒沢大学復刻版、一九五九年。その他。
- (47) 四五頁―四六頁にある「上下吟」という語および歌詞を指す「平、側、断、等々」の解釈は、説得性を度外視しても、興味深いものがある（ここで「上」は韻を踏まない前半を、「下」は韻を踏む後半を指す）。
- (48) メニスコフは「変とは、常ならぬ奇蹟的な〔出来事〕である」とする孫楷第の解釈を採用。この点、私には議論の余地があるように思える。この語〔変〕がどのような文脈で使われるかを検討して、私はこれを単に《*señae*》と訳すこととした。詩文混合体の物語形式が中国では共有財と

して認められている。しかしそれが仏典漢訳を通じてインドから借用したものであるとするメニシコフの考え方(二三頁—二四頁)には同感である。

- 64 cf. *Annuaire du Collège de France*, 1960, p. 319-320; 1961, p. 297-298. ヴェリオ第三〇七九号(『敦煌変文集』六三三頁)のコロホンによれば、変文は二十巻である。ところでこの巻は『維摩經』十四品中の第四品を取り上げたものである。

- 65 唐代の朔方(Cho-fang)は、現在の陝西省(Chen-si)にあった県名である。

- 66 BEFEO, XXIV, 1924, p. 184 の「六八〇年」は不注意なミスである。

- 67 同じ変文の別文書が九四七年に敦煌から遠く離れた西川(Sseu-tch'ouan)の西側で書写された。

- 68 『長恨歌伝』は、H. S. Levy による "Harem Favorite of an Illustrious Celestial", *Taichung*, 1958, p. 172-178 に英訳された。

- 69 諸橋轍次『大漢和辞典』七七一八頁c参照。

- 70 それと北京文書光九四。『敦煌変文集』(六三三頁註1)は、ペリオ第三〇七九号を誤って第二二九二号と記している。

- 71 レニングラード文書(Dx 684)は『目錄』第一四七五号で、二二センチの卷子の断簡(一四行)である。その他の断簡については、鄭振鐸が『中国俗文学史』(*T'chung*

-kono son uun-hue che, ed. 1938, p. 207)で「疑わしい指示を行なっている。王重民(『総目索引』四六九頁)の指示もまた、点検されるべきである。

- 72 「吉祥」(*Ki-siang*)とどう語は、文殊(Manjusri)の漢訳名が妙吉祥(Miao Ki-siang)とあるように、『57』を漢訳したものである。

- 73 変文(四行—五行)は、『文殊吉祥経』(*Wen-tch'ou ki-siang king*)と関連するが、この経文を引用していない。メニシコフが注記するように、この標題「十吉祥」は、他所には見られないようである(六〇頁註8)。漢訳大蔵経に『十吉祥』(『大正蔵』第四三二番)があるが、これは文殊と何んらかかわりない。文殊生誕の折にあらわれた十吉祥が『加持経』(*Mahastrotocana-sutra*, 『大正蔵』第八四八番)に述べられているという。メニシコフがそれを正確に指示していないので、その一文がどこにあるかは不明である。(五五頁註二二)。

訳者付記

「文獻および原註」は、一部本文中にあった註も含めて訳者の判断で文末に一括して掲載した。ロシア語については左近毅大阪市立大学教授に、中国語については衣川賢次花園大学専任講師にそれぞれ御教示願った。厚く御礼申し上げる次第である。なお衣川学兄によれば、最近の変文研究には次のものがある。

- (1) 『敦煌變文論文集』(上・下)、上海古籍、一九八二年
- (2) 任半塘「敦煌歌辭研究在國外——紀念“敦煌學”發展六十年」『文學評論叢刊』、第九輯、一九八一年
- (3) 張錫厚「敦煌文學的歷史貢獻——兼談八十年来敦煌文學的整理和研究」同右
- (4) 張錫厚『王梵志詩校輯』中華書局出版、一九八三年